

大規模ワクチン接種
黄熱の流行の収束に向けて

下島さんら3人の検査診断の専門家
が消耗品の提供と技術協力を
行ったことで、大量の未検査検体
が処理され、INRBは落ち着き
を取り戻した。こうして、黄熱流
行を食い止めるための迅速な対応
へとつながったのだ。

一方で、国立大学法人東北大学

大学院医学系研究科の神垣太郎助
教をはじめとする6人の医師や感
染症の専門家が協力したのは、8
月中旬以降に1100万人を対象
に予定されていた大規模ワクチン
接種キャンペーンに向けた提言
だ。「私たちの派遣期間中だった7
月は、キンシャサ州にある35郡の
うちの1つでワクチン接種キャン
ペーンが実施されていて、現場が
ある6カ所の保健セ
ンターなどを視察し
ました。接種は問題
なく行われていまし
たが、保健スタッフ
が、接種者の人数と
年齢区分は記録して
いるものの、性別の
情報を取っていない
などの課題も見つか
りました」と神垣さ
ん。このような指摘
は8月のキャンペー
ン時に生かされるこ
ととなった。
神垣さんは入念な
計画立案の重要性も
指摘する。「キャン
ペーンの実施までに
は、接種対象人口や
接種会場を決め、物
品の調達を行いつ
つ、住民に周知する
など、やるべきこと



7月に実施されたワクチン接種キャンペーンで、接種データの管理方法について、現地の保健省の担当者
に聞き取り調査をする神垣さん(右から2人目)

がたくさんあります。世界保健機
関(WHO)からの予算調達はは
じめ、調整には時間がかかります
から、1カ月前にはキャンペーン
全体の詳細計画を策定することが
必要です」
この他、神垣さんたちはINRB
Bや病院を訪問して、黄熱の発生
状況や推移など、対策のために必
要なデータを確認したり、既にワ
クチン接種キャンペーンが終了し

ている地域を視察して、接種後の
感染状況のフォローアップを行っ
たりした。「キャンペーン前には
保健スタッフの研修もあり、体制
面はしっかりしていました。現地
の保健省の他、WHOや赤十字な
どの国際的な援助組織が参加する
会議で日本の感染症対策チームと
して提言したのは、詳細計画の策
定が不可欠であること、また、計
画内容や課題点に関して関係者間
でのコミュニケーション強化が必
要であることなどです」
これらの提言を踏まえて現地で
は準備が進められ、8月中旬から
キンシャサの3000の接種会場
で実施されたキャンペーンは、大
きな混乱もなく無事終了した。
今回の日本の協力は、現地保健
省との連携が進められたもの。国
内外の支援機関との間で定期的に
会議を開催している保健省に対
し、日本は関係機関との協力体制
についての助言なども行った。こ
うして、8月のキャンペーン後、
黄熱の流行も収束に向かった。
チーム設立から約10カ月で、初
めての派遣となった日本の感染症
対策チーム。高い専門性とチーム
ワークにより、迅速かつ細やかな
支援が展開され、コンゴ民主共和
国の人命救助に大きく貢献した。
その援助能力は、今後も世界の感
染症対策に生かされることだろ
う。

現地保健省で開催された調整会議。保健省
と関係機関が黄熱の流行状況や課題などを
整理し、今後の対策を協議した



日本として世界の 感染症対策に貢献したい

コンゴ民主共和国では、今年3月以降、多くの人々が黄熱によって命を落とした。
黄熱の危機から人々を救うため、現地ですさまざまな援助機関の
スタッフらと共に汗を流した国際緊急援助隊・感染症対策チーム。
チームの立ち上げ以来初の派遣となった今回の活動を追った。

7月、ワクチン接種キャンペーン
に子どもを連れて訪れた現地
の女性。日本の感染症対策チ
ームによる視察で、接種方法な
どが確認された

日本の感染症対策チーム 初派遣はコンゴ民主共和国

昨年末以降、アフリカのアンゴ
ラやウガンダ、コンゴ民主共和国
などで、黄熱が流行した。黄熱と
は、黄熱ウイルスを持った蚊に刺
されることでかかる感染症。主な
症状は発熱や頭痛、吐き気などだ
が、適切な治療を行わないと死に
至る場合もある。一方で、ワクチ
ン接種を受けていれば予防する
ことができる感染症だ。黄熱感染
の危険性がある国では、入国者に
黄熱の国際予防接種証明書、通称
「イエローカード」の提示を求め
ることも多い。

コンゴ民主共和国では、今年3
月以降、首都のあるキンシャサ特
別州を含む5つの州で黄熱の患者
が確認された。6月20日には同国
政府が黄熱流行を宣言。3月以降、
7月20日までに、死亡者95人を含
む1900人の患者(疑い症例を
含む)が報告された。
この対応に尽力したのが、日本
の国際緊急援助隊・感染症対策チ
ームだ。感染症対策チームの発足
は昨年10月。2014年に西アフ
リカ地域でエボラ出血熱が流行し
たことを受け、世界規模の感染症
対策に貢献するため、日本は感染
症対策チームを設立したのだ。疫
学や検査診断などの専門家が続々
と登録し、今回、チームの立ち上



INRBの現地スタッフと共に抗体検査を行う下島さん。「INRBのいくつかの部
門や実験室を案内してもらい、今後の協力や関係構築に役立つ情報も収集
できました」と話す

げ以来、初めての派遣となった。
派遣期間は7月20日から8月7
日までの19日間。一陣と二陣の計
17人が、黄熱の検査診断支援、8
月に現地保健省が実施した大規模
ワクチン接種キャンペーンに向け
た提言、保健省への助言の3つを
中心とする活動を行った。
「派遣に先立つ調査の結果によ
ると、現地の国立生物医学研究所
(INRB)に多数の検体が届い
ているものの、検査用試薬の不足
などから、7月16日時点で300
の検体が未検査の状態にあるとい
うことでした。現地で使う検査用
消耗品のうち、冷凍・冷蔵保存が
必要なものは、派遣された隊員が